

## 九、無碍道

「私はお仏前に座った時だけでも心を散らすまいと思ひますのに、心は四方八方へ散り動いて困ります。どうしてこんな心なのでしょう。どうしたらこの心が散らずに定まりましようか。」

そうした問いをあまりにもたびたび聞く。これは真剣に仏に生きようとする者の一度は必ずぶちあたる問題である。これはいわゆる「定散自力」と言われる機の内、定善の機である。

「腹が立っていきません。腹が立たないようにはどうすればなりますか。」と問う人がある。答えは簡単である。「欲望を満足させてやりなさい。」

ニコニコしている時は善人で、腹が立った時だけ悪人だと思っている人がある。腹が立つのはもちろん悪いが、ニコニコしている時だって、別に善人になったわけではない。貪欲が満足しているだけのことである。

「私の心は暗くて暗くて困ります。どうしたら暗くなくなりましようか。いつも明らかに暮らしたいのですが。信仰が浅いのでしょうか。」と言う人がある。

だが心が定まらないのが問題であろうか。

心が憂鬱なのが、寂しいのが、そして腹がたつのが。

私はそれよりもっと重大な事があると言う。

私を見てだれも暗いとは言わない。むしろ私がいると明るくなると言う。しかし当の私はいつもの憂鬱で、近う近来、明るく朗らかであった日はない。そしてそれが年々深まってゆくようである。

私はただ、その暗い憂鬱な心に堪えているだけである。

私も以前は、瞋恚の炎が燃えている時だけが悪人であって、私がニコニコしている時は、善人であるかのごとく思った。しかし二河白道を聞いてから後は、ニコニコしている時は、水の河、貪欲の満足している相だと知らされた。冷たい気味の悪い青大将がうねりうねりしているのに過ぎない。

私は火と水をじつと凝視している。人は先生は腹を立てない人だというけれども。

大きな願いを持った大石由良之助か、はたして朗らかであったろうか。四十七士が明るかったであろうか……これは譬えであるが……

法然、親鸞両聖人、その他の聖賢が朗らかであったろうか。明るかったであろうか。

そしてただ明るいのがそれだけでいいことなのであろうか。

動く世相をじつと眺め、自己自身をじつと内省して、明るいのが朗らかなのがほんとうであろうか。私はそうは思わない。

承元の法難に吉水の教団がばらばらになる時、打首にあうもの、流罪にされる者、真実は蹂躪されて、人間の醜悪なものが勝ちをしめてゆく時、真実をじつと守って死すら覚悟する時、明るくて朗かであろうか。殉教の真理の使徒の心はいつでも暗い。人間的幸福を犠牲にし、命さえ投げ出した人であつても。

いつの時代でも、真実は必ず迫害せられる。真実を歩もうとすれば、必ず窮迫や貧困や苦しみがまつわりつく。それに堪えて、一道を歩みきるには強い力が要る。問題はその力である。

欲を超えて願に生きるか、願をすてて欲に生きるか、問題はそこにある。欲のため世にかくれて安逸を求めた大野九郎兵衛と、欲を超えて忠義に生きた大石由良之助と、どちらが苦しんだであろうか。世に、九郎兵衛はあまりに多く、由良之助はあまりに少ない。

願に生きる者も、思いは千々にくだける。深さの知れぬ幽鬱はある。しかし、願と力がその底に動く。念仏道を生きる者にも涙はある。

如来の本願力が衆生のものとなつて、金剛不壊の信力となる。この信力、一切の苦悩に勝ちつづけて、かえつて苦悩などのすべてが、信を培う縁となる。

無碍道ということが、氷の上を玉を転がすようなものであるならば、無碍道の意味はあり得ない。人生は限りなき有碍である。人生が生死の苦海で、はてしなき有碍なればこそ、その中に開く無碍道に意義があるのである。

しかしある意味で、われらは喜びに輝いて生きねばならない。聖人にも、「慶哉」と叫ばれる天地があつた。真実の意味では、われらは必ず勝利者でなければならぬ。聖人は衷心の満足と感謝をもつて世を去つた人である。

しからばいかにして、有碍を転じて無碍たらしめ、悲しみを変じて喜びとなし、敗北を越えて勝利者となることができるか、これだけは懸命になつて解決しなければならぬ。

魂の声、衷心の願いを見失わないで生きることである。

念仏行者は、十方無量の諸仏に護念証誠せられる。護念とは、念力をもつて覆い護りたもうことであり、証誠とは、虚偽をはなれたる誠実をもつて証拠に立ちたもうことである。念仏の人とは、如来の真実を生きる人である。ゆえに諸仏は、覆護加念し、証明誠実したもうのである。

人間の多数決が必ずしも真実ではない。人間の声よりも諸仏の護念証誠に生きなくてはならない。信に生きて自己を偽らない者にだけ、諸仏の護念証誠が聞こえる。

絶対勝利の無碍の道味は、求道不退の生活の上にもみあり得る。

人はしばしば、自分が天下一の物知りになった気や、何でもみな知った気になる。自分では得意でも他人から見れば、噴飯事である。

学べば学ぶほど無智に至って、「たとひ大千世界にみてらん火をもすぎゆきて」法を聞くべきであり、求むべきである。

正法に遠ざかった時、業苦の綱はこの人の手足をしぼる。私はあまりにも、その例を知りすぎる。

如来を無視して、如来にものを言わせなければ、必ず因果がものを言う。

善悪を超えよ。これ無碍に生きる必須の条件である。

人間の理性に、まったく狂いや曇りのないものなれば、理性にも言わす善悪だけでよからう。だが理性はけつして絶対ではない。理性は純粹ではなく、したがって理性の声は無上命令であつてはならない。

理性が如来の智慧によつて否定せられてのみ、人格生活は樹立する。

話に感激した時は、仏智がものをいうようでも、いざ實際生活となれば、瞋恚の赤眼鏡を通しての善悪を言う。人もわれも有碍に血みどろとなる。

聖人常に言わく

「善悪のふたつ、そうじてもて存知せざるなり。そのゆへは、如来の御こころに、よしとおぼしめすほどに（理性が）しりとほしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどに（理性が）しりとほしたらばこそ、あしきをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞ、まことにておはします。」

そこには、理性の上に鋭い批判が光つておる。理性を最上の位置にすえる学説も、生活も行き詰まる。

人間の理性よりも高き実在の世界から理性は智慧光の否定を受け取らねばならない。

福山の純ちゃんは、重い不治の病床で涙しつつ、「先生が、忍べよつてなことを教えるから……わがまま勝手も言えないではないか。ああ善知識は持たぬものだ。」と言つた。だが、純正光明団々員よ、一も忍べ、二も忍べ。三も忍べ。しこうして永遠に忍べ。

「忍力成就して、衆苦を計せず。」とは法蔵菩薩の願行ではなかつたか。

忍び得ぬ日、天下の同志を念ぜよ。忍びきる道、そこにのみ無碍道がある。

感謝と懺悔。忘恩と無慚無愧は無信生活の内容である。智慧の念仏に帰る時、見失われた汝自身が洗い出されるがゆえに慚愧があり、大いなるものに帰るがゆえに感謝がある。

菩薩の像には、上には光輪があり下には青蓮華がある。光輪は大いなるものの輝く相であり、蓮台は絶対人格の王座である。慚愧によってのみ人格の王座に帰ることを許される。

かくて真の勝利、無碍の白道は南無阿弥陀仏それ自身である。聖人御本典の巻頭にいわく

「竊に以みれば、難思の弘誓は難度の海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり」と。

喜、怒、哀、楽、愛憎、欲……さまさまなる波をそのままに、それよりも強い、それよりも深い、不退創造の念仏に生くべきである。